おひとりさまでも大丈夫？

吉田太一
（遺品整理会社キーパーズ社長）

壊れたまま修理もせず放置された電化製品。賞味期限切れの食品がミイラ化するまで放置された冷蔵庫。部屋中にばら撒かれたかのような一円玉や五円玉……。

これは実際に孤独死現場でたびたび目にする光景です。

年間に私達が関わる孤独死（腐乱死）は数百件。意外に思われるでしょうが、独居老人ではなく独居中年の孤独死が多いのです。

一九七〇年前後から日本は企業経済の発展により、自営業者など自己経済力で生計を立てる人々より、給与所得者の割合の方が高くなりました。そのため、他者への依存度の高い生活スタイルの人間が増えたと思われます。

彼らは五十代半ばから六十五歳までの年代でどちらかといえば団塊世代より下の人が中心です。三十～四十年以上、企業人としてがむしゃらに働いてきましたが、精勤な会社人間としての半面、不器用な一面が災いして自立心は薄く、生活が乱れた独身世帯の男性も多い。

また近年はコンビニの発達などもあって、そんな生活を誰にも干渉される事もなく世間から放置されてしまっているのです。

対照的に同年代以降の女性の「おひとりさま」は、男女雇用機会均等法などの影響もあって自立度が高まり、バブル崩壊を経験しながらも地に足のついた生き方を実践している人が多い。老後についても早くから考え、生前に遺品整理を依頼してくるのはほとんど女性です。

いま少子高齢化や核家族化という日本の人口構造の変化により、孤独死が急増する中、様々な対策が各自治体で取り組まれていますが、なかなか効果的な解決策には至っていません。

昨年、遺品整理屋の私は『おひとりさまでもだいじょうぶ。』という孤独死を防ぐ本を出版しました。遺品整理を日本で初めてビジネス化したのだから、孤独死が多いほうが仕事は増えます。それなのに、こんな本を出版するのは逆効果ではないかと御指摘も受けました。

しかし孤独死が増えている現実を余りにもたくさん目にする中で、自然とこの問題を危惧するようになりました。そして私たちだからこそ、何か出来る防止策があるのではないかと考えるようになったのです。

まず気付いたのは、多くの人が孤独死の悲惨な現実を知らないこと、他人事なのです。人間は「尻に火が付いたら動き出す」「火事場の底力」というように、本当の危機に気づけば自主的な行動を起こす潜在能力を持っているのだから、まず、目をそむけず知ってほしい。

人生の最期、死の瞬間を「ひとり」で迎えてもいい。しかし誰にも何日も気付かれないのが問題なのです。警察に通報され、私たち遺品整理屋が呼ばれると「腐乱した孤独死」になってしまいます。

男女を問わず自立している「おひとりさま」は、生活環境、経済環境、精神的、身体的にもバランスが取れています。

友人と喧嘩すれば仲直りをして元に戻す。電化製品が壊れたら修理して戻す。汚れたら拭く。体調が悪くなれば病院に行って健康状態を戻す。そして自分自身で周囲との生活のバランスを保っている。

要するに自立したおひとりさまは実は本当の「ひとり」ではないのです。

しかし、「孤独死」に陥りがちな人々は、生活バランスがあちらこちらで崩れているので、壊れたまま、汚れたまま、喧嘩したまま。冒頭にあげたような部屋の惨状はその結果です。

一つ一つはささいなことのようでも、「生活の基準」が壊れてしまっている。すると完全に孤立し、存在すら世間から忘れ去られてしまう。冷蔵庫の奥の、賞味期限の切れた食べ物と同じ存在になってしまうのです。

後期高齢者の孤独死が意外に少ないのは、長い人生経験のなかで「生活の基準」を知っているからではないでしょうか？